

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名	竹森美穂
学 位 の 種 類	博士（社会福祉学）
学 位 記 番 号	甲第 1 7 号
学位授与の日付	2021(令和3年)年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第 5 条
学 位 論 文 題 目	ソーシャルワーカーの継続学習に関する研究－保健医療分野のソーシャルワーカーを対象とした調査をもとに－
論 文 審 査 委 員	主査 眞砂照美（佛教大学教授） 副査 伊部恭子（佛教大学教授） 副査 木下康仁（聖路加国際大学大学院特命教授）

〔 1 〕 論文の概要

（ 1 ） 論文の目的と研究方法

社会福祉士国家資格誕生より 30 年以上、精神保健福祉士国家資格誕生より 20 年以上が経過した。この間、我が国の社会福祉システムは、日本型社会福祉国家の解体や社会福祉基礎構造改革の推進、高齢者領域における地域包括ケアシステムの構築の推進などの大きな転換を経験した。社会情勢はめまぐるしく変化を続け、支援を必要とする人々のニーズはより複雑化、多様化、重複化している。ソーシャルワーカーは、このような激動の中で様々な困難を抱える人々への支援の営みを継続させてきた。ソーシャルワーカーの質の向上が絶えず問われ続けている一方で、資格取得後のソーシャルワーカーの質の向上に向けた学びの営みや、それを支える外部資源がどのようにかかわっているのかなどの詳細については、養成教育レベルでの研究と比べて不明瞭なままである。その結果、ソーシャルワーカー個人が手探りで学びを重ねている状況となっていることが考えられる。

以上のような背景から、本論文は、継続学習の概念整理を行った上で、専門職団体の継続学習に関する国内外の文献研究を行い、保健医療分野のソーシャルワーカーを対象とした量的及び質的調査をもとに、継続学習行動の分析および、外部資源がどのように関わっているのかを明らかにしたものである。

本研究の独自性として、著者は次の 2 点を挙げている。1 点目は、ソーシャルワーカーの成長につながる継続学習行動の特性を明らかにすることである。2 点目は、継続学習を支える外部資源を視野に入れた研究であり、ソーシャルワーカーの学びを包括的に捉えることができるという点である。

研究方法としては、3 つの複眼的アプローチを採用している。

- ① 国内外の専門職団体が発行している資料等の文献研究による専門職団体の継続学

習支援システムの考察である。これにより専門職団体が継続学習をどのように捉え、当該専門職の学びに専門職団体がどのように関与しているかを明らかにした。

② 保健医療分野のソーシャルワーカーの団体会員への量的調査を実施し、学習実態と継続学習についての量的把握を行った。

③ 認定社会福祉士（医療分野）所持している者を対象として、インタビュー調査を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行い、ソーシャルワーカーがどのように継続学習を重ねているのかを明らかにした。

（２）論文構成

本論文は、序章および終章を含む全８章で構成されている。本論文の目次は次のとおりである。

序章 研究の課題

第１節 問題の所在と研究の目的

第２節 用語の定義と研究の範囲

第３節 研究方法と論文構成

第１章 現代社会におけるソーシャルワーカー像

第１節 専門職論の系譜

第２節 現代的ソーシャルワーカー像

第２章 ソーシャルワーカーの継続学習

第１節 Continuing Professional Development の枠組み

第２節 ソーシャルワーカーの継続学習に関する先行研究

第３節 継続学習を支援する外部環境に関する先行研究

第３章 専門職団体の継続学習支援システム

第１節 専門職論における専門職団体の位置づけ

第２節 わが国のソーシャルワーク専門職団体の継続学習支援システムの概要

第３節 国内医療系専門職団体の継続学習支援システムの考察

第４節 英・米・韓ソーシャルワーク専門職団体の継続学習支援システムの考察

第５節 わが国のソーシャルワーク専門職団体への示唆

第４章 保健医療分野のソーシャルワーカーの継続学習実態及び、専門職団体の継続学習支援システム活用に関する web 調査

第１節 専門職の継続学習に関する量的調査の先行研究

第２節 調査概要

第３節 調査結果

第４節 考察

第５章 保健医療分野のソーシャルワーカーの継続学習プロセスに関する質的調査

第１節 ソーシャルワーカーの継続学習研究における質的研究の意義

第２節 分析手法としての M-GTA

第３節 インタビュー調査の概要と M-GTA による分析の概要

第４節 M-GTA による分析結果

第５節 考察

第6章 結論 – ソーシャルワーカーの継続学習

第1節 研究結果

第2節 ソーシャルワーカーの継続学習行動 – ソーシャルワークを語るということ

第3節 専門職団体の機能 – マクロ的視点をもって批判的に省察し、議論する場

第4節 ソーシャルワーカーの継続学習

終章 研究の限界と展望

序章では、研究目的・背景・意義、用語の整理、各章の概要について述べている。

第1章は、専門職論の研究の系譜を整理しながら、現代的ソーシャルワーカーの基本的な立場について考察している。

第2章は、本研究の主題である、ソーシャルワーカーの継続学習に関する先行研究のレビューを行っている。従来、ソーシャルワーカーの継続学習については、ソーシャルワーカーの実践能力の変容や専門性の向上に焦点を当てたものが主であったが、ここでは近年親和性を増している生涯学習と組織学習の知見を援用しながら、ソーシャルワーカーの学びを支援する外部環境を主に検討している。

第3章は、ソーシャルワーカーの継続学習における外部環境の一つであり、本研究の主題の一つである専門職団体がどのようなシステムで専門職の継続学習を支援しているのかを、複数の対人援助職の専門職団体や海外のソーシャルワーク専門職団体を参照しながら文献研究を通じて考察している。その結果、専門職団体が継続学習の枠組みと、専門職団体、学習者、雇用者の責務や役割を提示していることが確認された。

第4章では、日本医療社会福祉協会会員を対象とした、継続学習の実態と専門職団体の活用に関する量的調査をもとに、継続学習を行っている人材像、専門職団体の継続学習支援システムにコミットしている人材像、ソーシャルワーカーの継続学習、専門職団体の継続学習支援等に関する考え方について分析している。量的調査の分析の結果、継続学習を行っているソーシャルワーカーは、多様な学習機会を得ており、学びのスタイル、ロールモデルの有無、キャリア形成志向の明確さが継続学習に影響を与えていることが明らかになった。加えて、社会正義志向のソーシャルワーカーは継続学習および専門職団体に積極的な態度を示していることが明らかになった。また、自由記述のテキストマイニングでは、専門職団体のマクロ的活動への期待が浮き彫りにされた。

第5章は、ソーシャルワーカーのうち、認定社会福祉士(医療分野)を取得した経験のある者を対象に行ったインタビュー調査の質的研究の部分である。分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を採用している。分析テーマを「ソーシャルワーカーが現場に出て、学びの必要性を認識してから継続学習を進めてゆくプロセス」とし、分析焦点者を、「継続学習を行っている現認の保健医療分野のソーシャルワーカー」として分析を行った結果、7つの【カテゴリー】、2つの《サブカテゴリー》、20の「概念」が生成された。

ソーシャルワーカーが継続学習を進めてゆくプロセスとは、【専門的アイデンティティの混乱】と同時発生的に【継続学習の必要性を認識する】ことを契機として、【力強く、しなやかな継続学習行動】を起こし、【生活に継続学習を馴染ませる】に至るプロセスであり、ソーシャルワーカーが自らの生活に無理なく継続学習を馴染ませるプロセスであった。さら

にこのプロセスでは、専門的アイデンティティと密接に関わりながら、クライアントのリアリティに迫るような「迫真的学習行動」と、自ら楽しんで学ぶ躍動的学習行動というソーシャルワーカーの継続学習の特性が示された。加えて、ソーシャルワーカーは専門職団体に継続学習の羅針盤的役割を求めていることが示された。

尚、第4章と第5章はソーシャルワーカーの継続学習の実態や専門職団体との関わりに関する研究上の問いについて、相互補完的な立ち位置にある。

第6章では、これまでの議論を総括し、3つの複眼的研究アプローチの文献研究、量的研究、質的研究の結果を踏まえて本研究の問いに対する次の三点を明らかにした。

一つは、専門職団体は継続学習の理念や方針、枠組みを示すことで、継続学習の大まかな方向性を示していることである。二つ目に、ソーシャルワーカーの継続学習は、自らの生活に学習行動を馴染ませる行為であり、その過程で多様な学びの機会を活用していること。三つ目にソーシャルワーカーの継続学習には専門的アイデンティティやキャリア、社会正義志向が影響を及ぼし得ることである。

そして、本研究はソーシャルワーカーの継続学習において次のように結論付けている。すなわち、ソーシャルワーカーが生活に継続学習を馴染ませるに至る過程で、方法論や制度理解にとどまらず、より根源的な問いに向き合うために、ソーシャルワークを語るということが重要である。また、そのような根源的な問いに向き合いながら学びを重ねるソーシャルワーカーに対して、専門職団体は集団としてのヴィジョンを示し、マクロ的視点で批判的に省察し、議論する場としての機能が求められる。その上で、ソーシャルワーカーの継続学習の重要な視点として、①継続学習の源泉、②継続学習様式、③源泉と学習様式の接合、④持続可能性、⑤継続学習文化をあげ、ソーシャルワーカーの継続学習の概念化を図ったものである。

〔2〕審査結果の要旨

本論文では、問いの設定、文献検討、多様な研究方法（数量的 web 調査、テキストマイニング、質的研究法 M-GTA）の活用による分析から考察と結論が一貫しており、論理的に記述されている。ソーシャルワーカーによる専門性の深化と継続学習との関係、および専門職団体の役割についての現状分析などについても、数量的調査と質的調査から独自の知見が得られており、このテーマに関する研究に寄与するとともに、著者自身の今後の研究の発展につながる結果となっている。

本論文のテーマに関する先行研究が少ない中で、保健医療分野のソーシャルワーカーの継続学習に焦点を当て、個人の成長のプロセスや能力の変容という観点からではなく、継続学習行動の分析からその特性を見出すとともに、その行動において外部資源がどのように関わっているのかということを明らかにするという点で、学術的な意義と価値、独創性を見出すことができると思われる。

さらに、本論文における継続学習を支えるシステムとしての CPD への着目は、専門職のエンパワメントを志向する研究、専門性に関する研究の発展に貢献するものであると評価できる。

質的分析方法である M-GTA の理解、特に【研究する人間】の視点は十分であり、所定の手順が踏まれており、深い解釈が行われている。そして、本論文に添付されている各概念の分析

ワークシートから解釈のプロセスが了解でき、分析焦点者の視点からの経験の再構成であるグラウンデッド・セオリーの生成までの統合化が行えていると考えられる。

また、「迫真的学習」と「躍動的学習」、「生活に継続学習を馴染ませる」、「継続学習の水先案内」などは、動きをとらえた概念としてプロセス性が感じられる。

ストーリーラインは、的確にプロセスが記述されており、本文中のデータからの引用も文脈性が明確で理解しやすく適切である。M-GTA の記述の特性、すなわち論理的な内容を分析焦点者が浮かんでくるような詳細な記述で表現することができている。

本研究で得られた成果は、ソーシャルワーカーが自らの継続学習を進めていくうえでの道筋を照らすことにつながり、実践現場での応用が可能と考えられる。

一方で、本論文の課題とともに今後の研究への方向性も指摘しておきたい。

まずは、概念規定と研究枠組、研究の範囲についてである。研究対象は、保健医療分野のソーシャルワーカーとなっているが、第1章から第3章までは、ソーシャルワーカー全般に関する内容となっているのに対して、第4章、第5章の調査対象としては、ソーシャルワーカーのうち、医療ソーシャルワーカー（MSW）が対象となっている。第4章、第5章の分析結果から考えると、論文全体を、医療ソーシャルワーカーにより焦点を当てた展開とするのも一考である。

また、第1章第2節の現代的ソーシャルワーカー像では、脱専門職化において、専門職が政治に取り込まれ、国家の影響力が増大していることに起因する現象とし、専門職が国家権力との関係の中で成立したものであり、政治的に利用される危険性と隣り合わせであるからこそ、「社会正義」が重要であるという指摘がなされている。そのことと合わせて、当事者主体、利用者主体というパラダイム転換も、脱専門職化の背景にあると考えると、ソーシャルワーカーが利用者、当事者との援助関係において「社会正義」を重視するという立場についてもより言及されたい。

専門職団体の議論はマクロ的な面に偏りがちになるが、継続学習との関連から直ちにマクロレベルのソーシャルワークについての理論へと結び付けることは、少し唐突に感じる。今回の結果を踏まえると、メゾレベルに視点を下ろして、もう少し専門職団体がどうあるべきか、ありうるかについて示せたのではないか。専門職団体を主語にして、ソーシャルワーカーに向けて記述してみると具体的な提言までできたと思われる。これについては、インタビューガイドとの関連で、専門職団体についてのデータ収集が必要であり、今後の研究に期待したい。

M-GTA の結果図について、実践的活用では、どこを抑えたらこのプロセスが稼働でき、水先案内としての専門職団体は外部環境としてどうあればよいといえるのか、もう少しわかりやすく提示できるとよかったと思われる。

以上を踏まえ、研究上の課題点も残されているが、著者の明確な問題意識に基づき、意欲的に取り組まれて生み出された実証的な研究であり、その学術的価値は高く評価できる。

よって、本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するに相応しいと判定する。